ドイツ語統語論研究史 (1)

西　本　美　彦

序

1.　ドイツ語統語論に関する研究は，統語論 Syntax そのものの概念規定，つまり研究対象の理論的な基礎づけと，その記述方法に関する充分な考察が欠落しがちな傾向の中で，主に資料集収的な性格の統語記述が先行して行ったと言える。

統語論の研究は，初歩的であるとは言え古代ギリシア，ローマ時代，中世を通じて徐々に理論的な考察が行われてきた。ドイツ語統語論を始めて大規模に取り扱ったのは Jacob Grimm である。史的比較文法の創始者の一人であり同時にゲルマン語学の創立者である彼は，その主著 "Deutsche Grammatik" (4 Bde, 1837) の第 4 巻を統語論にあてている。Grimm はドイツ語を歴史の流れの中で法則に従い発達していく一つの統一体 (Einheit) として，つまり一つの巨大な有機体 (Organismus) として観察し記述しようとしたのであるが，こと統語論に関しては，彼の概念規定は不充分なものであると言わざるを得ない。彼は文を構成する成分として主語名詞 (Nomina) と述語動詞 (Verba) だけが基本的なものであるとしてきわめて初歩的な分類に甘んじている。この点に関して言えば Grimm は，それ以前の統語理論およびその当時の統語論研究に対して殆んど無関心であったとしか考えられない。というのは，今日ではドイツ本国においてすら忘れ去られ，近年ようやくその業績の客観的再評価がなされている Karl F. Becker は文法書 "Deutsche Grammatik" ([1]1829) の中ですでに 5 個の文肢 (Satzglieder)：主語 (Subjekt)，述語 (Prädikat)，付加語 (Attribut)，

目的語（Objekt），副詞規定（Adverbiale），からなる文法体系の記述を提案しているからである。Becker の文法理論は後世の学校文法にも多大の影響を与えたにもかかわらず Grimm 以後のドイツ語統語研究においては Becker の理論がなんらかの形で引き合いに出されることはなかった。

本論文の第一章では統語論研究の流れを古代ギリシャ・ローマに追い，中世の研究にも注目し，さらに Martin Luther の聖書翻訳のあと相次いで出版された初期ドイツ語文法書の統語論を論じることにより，Grimm に至るまでの，とりわけ Becker 前後の統語論に詳しく触れていく予定である。

2. 19世紀に入ってドイツを中心として発展していったインド・ゲルマン語（Indogermanisch）の比較研究は特に音韻法則（Lautgesetz）を重要な決め手として，インド・ゲルマン諸語の近親関係の解明とインド・ゲルマン祖語（Urindogermanisch）の音韻，形態，統語体系の再構築を主要な課題として急速に発展していった。なかでもいわゆる青年文法家達（Junggrammatiker）の活躍は目覚ましく，彼らの研究によりインド・ゲルマン語の基本構造は明確にされていった。19世紀末から1930年頃にかけて主に青年文法家達を中心としてゲルマン語，ドイツ語の文法体系の史的研究が数多く行なわれ，この期間に編纂されたドイツ語文法書およびドイツ語統語論研究書の大部分はその厖大な資料の価値から言っても今日なお貴重な研究書としての地位を保っている。これら文法書，統語研究書のうち重要なものとして次のものがある：

Oskar Erdmann, "Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung" (1. Teil 1886, 2. Teil von Otto Messing 1897)

Hermann Wunderlich, "Der Deutsche Sprachbau" (1892)

Wilhelm Wilmanns, "Deutsche Grammatik, Gotisch, Alt-, Mittel-und Neuhochdeutsch" ([1]1893-1897, [2]1896-1909)

Friedrich Blatz, "Neuhochdeutsche Grammatik" ([3]1896, Bd. II Satzlehre)

George C. Curme, "A Grammer of the Germann Language" ([1]1904, [2]1922)

Hermann Paul, "Deutsche Grammatik" (5 Bde, [1]1916-20)

Otto Behaghel, "Deutsche Syntax" (4 Bde, 1923-1932)

Erdmann の "Grundzüge der deutschen Syntax" は新高ドイツ語に焦点を合わせた統語論で，その記述は Grimm の統語論と較べてもはるかに体系的である。彼はその序言の中で統語論の概念規定について言及し，スラヴィストの F. Miklosich がその著書 "Vergleichende Grammatik der Slawischen Sprachen" (1883) の第四巻で行なった定義の「文法の中で品詞と語形の意味・用法を記述する部分が統語論である」という考え方に賛同しているが，それ以上の理論展開は見られず，当時の言語研究の特徴である歴史主義的，経験主義的な姿勢はくずしていない。

つづく Wunderlich の "Der deutsche Sprachbau" はその第2版(1902)の中で統語論の方法論について述べ，Syntax という語自体に表わされる統合的な方法に対して分析的な方法，すなわち語から出発するのではなく文を統語記述の起点とすることの重要性を主張している。この見解は以前の Grimm や Erdmann には見られなかったもので，それまでの統語理論に真向から対立する新らしい視点に立つものであった。ところが "Der deutsche Sprachbau" には Wunderlich の唱える統語理論が有効に生かされた記述は少なく，Becker の文法理論や Romantik の言語観，ひいては後の意味内容文法 (Inhaltbezogene Grammatik) の言語解釈に通じると思える直感的な分析方法が混在している。

Wilmanns のドイツ文法 "Deutsche Grammatils" は教科書的性格を持つものであり，統語論を直接扱った項目はないが，随所に統語論に相当する記述が見られる。しかしそれらの記述も品詞，語形の意味用法の域から脱したものではない。また本論で詳しく考察する予定ではあるが Blatz の "Neuhochdeutsche Grammatik" にも統語理論の展開は試みられておらず，歴史主義的な記述が中心となっている。

Paul は "Deutsche Grammatik" の第3巻の序言の中で Erdmann と同じく Miklosich の統語概念を受け入れている。しかし Paul の場合，統語論は個々の語を伝達目的のためにいかに秩序づけるかを記述するものであり，意味論の一部を成していると考えられている。その際 Paul はある語が呼び起こす心像（Vorstellung）と他の語のそれと結合の仕方を記述しようとするが，彼の言う語の心像を科学的に実証する方法論については何も述べられていない。Paul の，この心理主義に基づいた統語記述はそのためいたるところで即断的，直感的であり，ドイツ語の統語体系を解明しえたとは言い難い。

統語理論という観点から言えば Curme のドイツ文法も伝統的な学校文法の域を一歩も脱していないと言える。

さてこの様な統語研究の状況の中で John Ries は統語理論研究書 "Was ist Syntax ?" ([1]1894, [2]1927) を発表している。この書は当時に至る統語理論の諸説に厳しい批判を加え，新らしい統語理論を提起しようとしたもので，のちの統語研究に多大な影響を与えたものである。Ries は当時の統語研究を評して，その現状は矛盾だらけの体系（System）と無体系の折衷論が混沌として乱立していると指摘しても誇張ではない，と述べ，いわゆる文章論（Satzlehre）と品詞，語形の意味・用法を専断的に混合しているとし，従来の統語論を総じて「混合統語論」（Mischsyntax）と

名付けた。同書の中で Ries は統語論の対象を二つの主要部分，語群論（Wortgruppenlehre）と文章論に分ち，これら両者間には主従関係は成立せず，相互に交差し合い，それぞれ統語体系の異なる次元に属するものであると考え，統語論を文と語構成に関する理論であると定義づけたのである。Ries の定義はのちの統語論研究に重要な示唆を提供し，その定義に基づいた統語記述の可能性についての議論も活撥に成っていったのである。しかしながら前述のドイツ文法書，ドイツ語統語論研究書を含め Ries の理論を記述の全域に取り入れ，またはそれを展開することのできたものは皆無であった。

さて厖大な資料を駆使しドイツ語統語論の全体像を網羅しようとした Otto Behaghel の "Deutsche Syntax" は史的な観点からだけでなく，法則性を検出しながらドイツ語統語論の全体像を照らし出そうとした大著として，今日なお統語研究におけるゆるぎない地位を保持している。"Deutsche Syntax" では従来の記述にはなかった構造主義的な概念が導入され，この書の大きな特徴の一つとなっている。Behaghel は意味内容ではなく，外面上の事実を記述の出発点に置くと明言しているものの，実際の記述には従来からの経験主義と心理主義が混在している，これらに加えて論理学の概念の適用が随所に見られ，そのためドイツ語統語論の全体像の把握を妨げる結果となっている記述も多く，統語論の一般的な法則性を充分に明確化できていないと言える。

第二章では Grimm に始まってドイツ語統語論の史的研究が最盛期を迎え Behaghel によって集大成される時代を Ries の統語理論を軸に論じていきたい。

3. 1930年代にはいる頃から1940年代にかけて統語論の概念規定や方法論に関する議論が盛んになっていった。その議論に大きな刺激を与えたの

は H. Lommel のドイツ語訳 (1931) により良く知られるようになった Ferdinand de Saussure (1857-1913) の "Cours de linguistique générale" 「言語学原論」である。当時統語理論の進展のために活躍した学者には Walter Porzig, Friedrich Neumann, Leo Weisgerber, Gunther Ipsen, そして "Sprachtheorie" (1934) の著者 Karl Bühler 等がいる。

またドイツ語統語論に関する著書も数多く発表されている。Erich Drach "Grundgedanken der deutschen Satzlehre" (1937), Wolfgang Pfleiderer "Der deutsche Satzplan in seinen Grundzügen" (1940), Hans Glinz "Geschichte und Kritik der Lehne von den Satzgliedern in der deutschen Grammatik" (1947) 等々。

1950年代に入ってドイツ語統語論の研究は主に意味内容文法 (Inhaltbezogene Grammatik) を提唱する学者 (Johannes Erben, Paul Grebe, Hennig Brinkmann, Leo Weisgerber) 達の手に委ねられていく。彼等の研究成果を評価することは確かに難かしいと言わざるを得ない。本論では意味内容文法の言語観を批判的に論述していく中で，その統語研究の誤りと功績を客観的に分析したい。

第三章では Behaghel のあとの統語研究をたどり Leo Weisgerber に至る研究成果について論じる予定である。

本論文はドイツ語統語論の研究の流れを史的に観察し，統語理論，統語記述の問題点を分析していく中で統語体系の具体像を浮き彫りにしようとするものである。このような目標に近づくためには，言語学史，文法理論史を避けて通るわけにはいかず，この意味においては本論文の題目は補足されなければならないと言える。

ドイツ語統語論の研究史を扱った書としては Hans Glimz の "Deutsche Syntax" (1965) がある。この書は120頁ほどの中にドイツ語統語論の研究

の流れを手際よくまとめてあり，統語論研究の入門書的な性格を持っている。だが，その記述全体を通じて私見に陥っている個所も少なくなく，また Grimm から Behaghel までと意味内容文法の研究が特に詳しく取り扱われているのに対して他の時代の記述が少なく系統的な論述に欠けている。筆者の論文は Glinz の "Deutsche Syntax" で欠落している個所を補塡する課題も同時に担っている。

第一章　古代ギリシャから F.K. Becker に至る統語研究（その一）

1.　古代ギリシャ時代

この論文の研究対象である "Syntax" という概念自体を史的に溯ってみることにより，その概念内容が古代から現代にかけてどのように変遷して来たかを知ることができる。またそうすることにより Martin Luther の聖書翻訳以後16世紀後半から矢継ぎ早に出版された初期のドイツ文法書をへて Justus Georg Schottelius (1612-1676), Johann Christoph Gottsched (1700-1766), Johann Christoph Adelung (1732-1806) 達によって集大成され，Karl Ferdinand Becker (1775-1849) によって学校文法として定着されていった諸ドイツ文法書の中の統語概念，および統語記述を系統的に把握できると言える。

さてドイツ語学の中でも今日一般的に受け入れられている Syntax という語は，語源的に溯ってみると，古代ギリシャ語 *σύνταασσω*「まとめて並べる，秩序づける」に由来し，その抽象名詞 *σύνταξις*「整頓，秩序づけ」が元となっている。古代ギリシャにおいて *σύνταξις* は元来ギリシャ語正書法の中で主に文字の統合，分綴法に関して用いられた概念である。

σύνταξις をもっぱら正書法の概念として用いた文法家の代表者は紀元2世紀にアレクサンドリアで活躍した Herodianos Dyskolos である。彼は著書 "περὶ συντάξεως τῶν στοιχείων"「文字の結合について」の中でどの文字がどの文字と結合しうるか，また綴りをいかに分ち書きするかについて述べている[1)]。しかし Herodianos の父であり，アレクサンドリア学派を卒いる文法家であった Apollonios Dyskolos は σύνταξις という概念を語レベルにあてはめており，彼の著した4巻からなる "περὶ συντάξεως"「シンタクスについて」は統語論研究の草分け的な著作として評価され Apollonios をして統語論研究の祖と言わしめたものである。

Apollonios に至ってようやく萌芽した統語論研究が彼以前の言語観察の成果をその土台にしていることは当然である。そこでアレクサンドリア学派が活躍する前の言語研究，統語論研究の状態は一体どうであったのか，その過程を概観しておくことは不可欠である。

古代ギリシャ，アテナイを中心に行なわれた言語研究の主なテーマは思考と語，事物と名称の間の関係を説明することにあった。なかでも何世紀にもわたって議論がくり返されたいわゆるピュシス・ノモス（φύσις・νόμος）論争は古代ギリシャの言語観を象徴的に表わしている。この論争は，自然の事物はその本性に従って（φύσει）命名されているのか，それとも恣意的に慣習的に（νόμῳ, θέσει）命名されているのかという問題提起から始まったのであるが，幾つかの説の中でもとりわけ Platon (427-347 v. Chr.) の考え方は後の言語学者の注目をひいた。Platon は彼の有名な対話篇 "Kratylos"「クラテュロス」の中でピュシス説を主張する Kratylos とノモス説を唱える Hermogenes との論争の決着を Sokrates に委ねる。そこで Sokrates の口を借りる Platon は両説の長所と短所に触れた上で，語は単なる模倣ではないが事物の本性の言語形式であると結論づけるのである。

Platon は自説を証明するために数多くの語源解釈を試みているが，多くの場合，例えば ἥρωες「英雄」は ἔρως「愛」に由来しているといったこじつけの解釈，いわゆる語源俗解に満ちている。Platon 流の語源俗解はのちの文献にも多く見いだすことができ，そのため Platon を語源学の創始者と見做す者もいる[2)]。

Platon の命名論および語源論はともに意味論 (Semantik) の領域に属する分野である。彼の功績のうち統語論に関係してくる記述は "Σοφίστης" 「ソピステース」の中に見られ，λόγος「ロゴス，文」はその基本的成分である ὄνομα (nomen)「動作を行なう者の名」と ῥῆμα (verbum)「動作の名」から成ると定義している[3)]。元来論理学あるいは哲学上のものであるこの区別は後代の文法家によって補足されることになるが，伝統文法の品詞分類の中ではそれぞれ「名詞」と「動詞」に相当するものである。

Platon が言語を主に哲学（イデア論）的な視点から観察したのに対し，彼に続く Aristoteles (384–322 v. Chr.) の言語に対する関心はそれを論理学的に観察，分析することにあった。それゆえ彼も厳密な意味での正統な文法家ではない。Aristoteles はピュシス・ノモス論争に関して，語は慣習によって成立していると考え，この点においても Platon と出発点が異っている[4)]。さて Aristoteles の言語論の中で統語論に重要な関係を持っている洞察は少くはない。彼は Platon から受け継いだ語の分類の単位 ὄνομα (nomen) と ῥῆμα (verbum) に加えて σύνδεσμος「接続語，つなぎのことば」を設定している[5)]。この σύνδεσμος という概念には接続詞をはじめ前置詞，代名詞，冠詞も含まれている[6)]。

つぎに Aristoteles は統語語論上きわめて重要な概念 πτῶσις「格（活用）」を導入している。ところが彼のいう πτῶσις はその適用範囲が広く，単に名詞の格変化に限らず，動語の変化形にも当てはめている。また名詞

の性（genus）を3つに区別し，その主格の語尾に従って性の法則を確立しようと試みたのも Aristoteles である。彼の言語観察には例えば *πτῶσις* の概念規定ように分析的な視点がうかがわれるがこれは元来論理学に基づいたものであり言語・文法レベルのものとしてはやはり通用しがたい面をもち合せている[7]。

多少なりとも体系化された統語論の基礎は Aristoteles においても成立を見なかったが，やはり論理学を言語研究の主たる基盤として紀元前4世紀の初頭から活躍したストア学派の（この学派はいわゆるプユセイ説を主張し Platon 流の語源解釈に精を出したことは知られている）文法研究に関する功績には注目に価するものが多い。まずストア学派は Aristoteles に見られた言語の論理的研究と文法的研究の混同を避け，両者間の区別をより明確にし，次に言語研究における文法単位に正確さを加え，とりわけ品詞論に関してはその分類を一層前進させている[8]。従来の研究ではのちに述べる Apollonios を統語論の創始者と見做すのが伝統的な解釈であるが，近年の研究成果をみるとストア学派の文法家達においてすでに統語論に結びつけることがでできる考察が充分行なわれていたと考える学者もかなりある[9]。

さてストア学派の文法研究の成果の中で注目すべき一つは文法範疇「格」を確立したことである[10]。後期ストア学派の Chrysippos はその著作だとされている "*περὶ τῶν πέντε πτώσεων*" 「五個の格について」の中で *πτῶσις*（casus）「格」を *ἡ ὀρθή*（*πτῶσις*）（casus rectus）「正格(主格)」と *πλάγιαι*（casus obliqui）「斜格」に分け，斜格には *γενική*（genetivus）「属格」と *δοτική*（dativus）「与格」と *αἰτιατική*（accusativus）および *κλητική*（vocativus）「呼格」があるとしている。呼格を一つの格として認めるのには異論があるとしてもこの分類は現代に至るまで手を加えられる

ことなく受け継がれて来ており，Aristoteles の πτῶσις という曖昧な概念はストア学派によって限定され一気に文法レベルに固定されたといえる。

品詞分類に関しては，初期のストア学派が考えたのはおおむね Aristoteles の分類[11]に基づいており，ὄνομα (nomen)，ῥῆμα (verbum)，σύνδεσμος (coniunctio) と ἄρθρον (articulus) の 4 品詞である。Aristoteles の σύνδεσμος はここで屈折変化をする ἄρθρον（冠詞と代名詞に相当する）と，屈折変化をしない σύνδεσμος（前置詞と接続詞に相当する）に区分された。また前出の Chrysippos は ὄνομα をさらに個有名詞（ὄνομα）と普通名詞（προσῆγορια）に分けている（ただしこの分割はのちに Thrax によって訂正され再統合された）。そして第 6 番目の品詞として Antipater v. Tarsus が μεστής「副詞（分詞をも含む）」を設定し，ここに 6 品詞体系が作り上げられたのである。

ストア学派の功績の中で重要なものの一つは，彼等がギリシャ語動詞の時制（tempus）の研究に大きな成果をあげたことである。ストア学派によって認められた区別は：継続，未完了の時制（χρόνος παρατατικὸς）としての「現在」(praesens) と「過去」(imperfectum) と終結・完了の時制（χρόνος συντελικὸς）としての「現在完了」（perfectum）と「過去完了」(plusquamperfectum)，さらに χρόνος ἀόριστος「アオリスト」(aoristus) と μέλλων「未来」（futurum）である[12]。先ず最初の 4 つの時制の区別はいわゆる「相」(aspectus) が設定の基準に置かれている点は注目に価することである。一方「未来」や「アオリスト」がこの基準からはずされている点は，彼らが意味に頼りすぎ，一定の「時制」や「相」に帰すことができると考えおよばなかったのであろうと考えられている[13]。ストア学派の文法分析はさらに「法」（modus）の分類も試みているが，この分野に関しては後世の研究に影響を与えるほどの成果は認められない。

今までに概観して来た Platon，Aristoteles，ストア学派の言語観察，文

法研究は本質的にはやはり言語哲学的あるいは論理学的な視点から免れることはなかったと言える。その研究は主に品詞論を中心にした文法単位の設定をめぐって進展して来たが，統語論領域に関する議論はきわめて乏しく，わずかにストア学派の文法研究の中で統語論に結びつく幾かの文法範疇が提供されたに過ぎない。

2. アレクサンドリア学派

やがてアイクサンダー大王の死 (323 v. Chr) とともにアテナイが政治的に没落していく中で，ギリシャ文化，学芸はアレクサンダー大王によって植民地化されたエジプトのアレクサンドリアとペルガモンを中心に引き継がれていった。とりわけアレクサンドリアは Aristoteles の蔵書を受け継ぎ，これをアレクサンドリア文庫の基礎とし，Aristoteles の学風のもと多くの学者を生みだしたのである。なかでもアレクサンドリア学派と称される文法家達の言語研究への貢献は目を見張るものがある。彼らを文法研究に熱中させた要因は，Homer を始めとする古代ギリシャ文学は当時の口語ギリシャ語では注釈なしにはもはや誰にも解らないほど隔たりが生じていたことを自覚したことである[14]。

その時代の代表的な文法家は何と言っても Dionysios Thrax (170–90 v. Chr.) である。彼の著作 "τέχνη γραμματική"「文法術」は紀元1世紀に Reminius Palaemon によって "ars grammatia" としてラテン語に翻訳されている。それ以後近代に至る間に書かれた文法書はその分類および記述にわたって何らかの形で Thrax の文法を根底にふまえている[15]。ここでは Thrax の「文法術」の中から統語論に関係している項目を中心に考察していくことにする。Thrax の文法は全体で25章からなる短い書であるにもかかわらず，分析的な方法に基づいており，統語論の萌芽を認めることがで

きる。まず11章では *λόγος*「文」を定義して「文はそれ自身完結した思想をもつ語の結合である」としている，一方 *λέξις*「語（品詞）：pars orationis」を定義して「語はその構成によって成り立つ文の最少の単位（部分）」と述べている。文を「語の結合」と考える点においては正に統語論に基づいているのではあるが[17]，文を同時に「完結した思想」と考える点においてはThrax が古代ギリシャ哲学古来のロゴスの概念に囚われていると言わざるをえない。実際には文の内容すべてが完結した思想であると限ったものではなく，未完結のものや思想以外の願望，命令，推則他の内容もありうるからである[18]。Thrax の語の定義は Syntagma を前提にしたもので，文の構成成分としての見方はやはり統語論に基づいた発想である。しかしながらこの定義では語自体に宿る統語能力や語の意味論的な価値単位は度外視されている。

Thrax は上の定義をもとに次の8個の品詞を定めている：1. *ὄνομα* 名詞，2. *ῥῆμα* 動詞，3. *μετοχή* 分詞，4. *ἄρθρον* 冠詞，5. *ἀντωνυμία* 代名詞，6. *πρόθεσις* 前置詞，7. *ἐπίρρημα* 副詞，8. *σύνδεσμος* 接続詞（第11章）。

名詞は格変化をともなう品詞で，*γένη* 性（*ἀρσενικόν* 男性，*θηλυκόν* 女性，*οὐδέτερον* 中性），*ἀριθμοί* 数（*ἑνικός* 単数，*δυϊκός* 双数，*πληθυντικός* 複数）および *πτῶσις* 格（*ὀρθή* 正〈主〉格，*γενική* 属格，*δοτική* 与格，*αἰτιατική* に対格，*κλητική* 呼格）の付随変化をする……（第12章）。

動詞は格変化をせず，*χρόνοι* 時制（*ἐνεστώς* 現在，*παρεληλοθώς* 過去，*μέλλων* 未来），*πρόσωπα* 人称，*ἀριθμοί* 数をともなう。動詞の付随変化として *ἐγκλίσεις* 法（*ὁριστική* 直説法，*προστακτική* 命令法，*εὐκτική* 希求法，*ὑποτακτική* 接続法および *ἀπαρέμφατος* 不定法〈詞〉と *διαθέσεις* 態（*ἐνέργεια* 能動態，*πάθος* 受動能，*μεστησ* 中動態）がある……（第13章）。

分詞は動詞と名詞の性質を共有する品詞で，人称と法を除いて名詞や動詞と同じ付随変化をする（第15章)。冠詞は名詞に前置（冠詞の場合）又は後置（関係代名詞の場合）され，格変化をする品詞である（第16章)。代名詞は名詞の代りに用いられる品詞で特定の人を示す（第17章)。前置詞は，（接頭辞として）後続の語に結合するにせよ名詞の格形と共に用いられるにせよ，あらゆる品詞に前置される品詞である（第18章)。副詞は格変化をせず，動詞との関連で用いられ，それに何かを添加する品詞である（第19章)。最後に接続詞は思考をある決った配列に従って結合し，言の間隙をうめる品詞である。これには，繋辞的，離接的，条件的，因果的，帰結的，懐疑的，推論的および虚辞的なものがある（第20章)[18]。

Thrax の文法の骨格はおよそ前述の如くである。一見して解ることは Thrax の文法が当然不充分な記述も多くあるとは言えともかく大まかながら文法の全体像を把握していることである。その後の伝統文法に受け継がれて行った主要な文法範疇は一応全て Thrax の文法に見いだすことができると言っても過言ではない。

しかしながら各品詞の記述は必らずしも統一的な基盤の上に立ったものとは言い難い。例えば名詞，動詞，代名詞については主に形態論の観点から記述しているが，一方前置は統語論的な記述が，そして冠詞と副詞は形態論的かつ統語論的な記述が優先している。また接続詞のみは意味論的な分類がなされている。このことからして Thrax の文法の特徴はやはり語の変化，すなわち形態論を主軸とする文法記述であると見做すことができる。統語論的な記述が随所に見られるといえども，それらはせいぜい語順，それも初歩的な語順に関するもので，またギリシャ語の統語体系の把握に繋がる示唆も全く提供されていないと言える[19]。

Thrax の文法に欠けている統語論の部分はすでに述べた Apollonios Dys-

kolos によって補われることになる。

主に言語史に専心した息子の Herodianos と共に Apollonios は，鋭い洞察力と活撥な著作活動でもって数多くの書を著したアレクサンドリア学派の代表的な文法家である。おそらく10篇を超すとされる彼の著作のうち現存としているものは極少ないが，幸いなことに彼の主著とされる "περὶ συντάξεως"「シンタクスについて」はその内容を知る上に重要な個所は大部分残っている[20]。この著書はそれまでの文法書を根本的に書き換え，統語論の原型を築いたとして，すでに述べたように Apollonios はその後の文法家達によって「統語論の父」と呼ばれるようになった。彼の統語論のうち現存しているものは4冊で，その第1冊は「冠詞」を，第2冊は「代名詞」を，第3冊は「動詞」を，そして第4冊は「前置詞」をそれぞれ取り扱っている。

まず彼は，語を配列することによっていかに独立した文が形成されるかという問題を取り上げ，順番に個々の品詞の機能に触れて行きながら，それを解明しようとする。Apollonios は，統語論を文とその成分の理論として解釈するのではなく，文は所与のもの，つまり調和を持った完全な文に語が統合したものと見做されるがために，統語論とは言語要素を組み立てて次のレベルの統合体を作ることであると広義の定義付けをしている[21]。そこで彼は語の統合（結合）によって文が成立していく過程を品詞（語）自体に内在している本性から説明しようとする。その際 Apollonios は必らず2つの語の結合を考えており，この2つの語がいかに一つの語（一体）に組み立てられていくかを論じている。それは例えば冠詞と名詞の組み合せ，代名詞と名詞の組み合せ，または名詞と動詞の組み合せといった形で考察される。

彼の統語論の第1冊「冠詞」は冠詞と名詞ならびに名詞類の統語につい

て述べたもので，冠詞をつける必要があるかないかは冠詞の意味によって決るとしている。第2冊の「代名詞」は代名詞の用法とその特徴を取り扱ったもので代名詞と名詞の結合および，どの程度まで冠詞をともないうるか（第1冊でも述べられている）について述べたものである。第3冊の「動詞」では幾つかの重要な文法概念が始めて導入されている。その一つは文法的一致（Kongruenz）である。Apollonios は文が文法的に正格であるためには文主語（主格）とそれに属している動詞形の間に一致が成り立っていなければならないとする。さらに名詞（類）の性，数，格の一致についても触れられているが，この点に関する説明は明確さを欠いている。次にApollonios は動詞の格支配（Rektion）の概念を始めて提言して，どの動詞が，どういう理由で名詞の属格形，与格形あるいは対格形を求めるかを記している，例えば対格形は行為を被る人を求める動詞と，属格形は行為を及ぼすことを意味する動詞とそして与格形は贈与を意味する動詞とそれぞれ共起すると述べている。ところが *τοῦτον φοβοῦμαι*「私はその人を恐れる」という表現においては行為を被る人間は *τοῦτον*「その人を」ではなくて *φοβοῦμαι*「恐れる」の主語である「私が」それに相当するという矛盾が生じてくる。そこでApollonios はこれもまたギリシャ語文法では始めての「省略」(Ellipse) という概念を採用することにより逃げ道を講じている。つまり *τοῦτον φοβοῦμαι* は *διὰ τοῦτον φοβοῦμαι*「私はその人が原因で恐れを抱いている」の *διὰ*「……の原因で」が省略されていると釈明している。なお第4冊の「前置詞」では前置詞と動詞の合成結合および前置詞と名詞の結びつき方，さらに前置詞の位置とアクセントの問題が取り扱われている[22]。

Apollonios の統語論はこのように数々の斬新的な概念を提示し，従来のせいぜい語順にしか手の回らなかった統語記述を一気に凌駕したのであ

る。こうして Apollonios によって始めて統語研究の貴重な道標が建てられたのであるが，ギリシャ語に関しては彼に続く文法家は生れなかったし，また彼の功績を受け継いで統語論をさらに発展させた研究家も見当らない。

3. ローマ時代

そこでローマの方に目を転じてみることにする。ローマにおいて言語研究を盛んにさせた人物として紀元前 167 年頃ペルガモンからの使節としてローマに滞在し，言語学の講義を行なった Crates v. Mallos がいる。Crates は当時アレクサンドリア学派とペルモガンの学者達の間で激しくくり返されていた変則論（ἀνωμαλία）対類似論（ἀναλογία）の論争を紹介している。元来哲学の問題であったこの論争は言語学にも持ち込まれ，言語には変則性は存在しないと考えるペルモガンの学者達は変則論を，他方言語は厳密な法則から成り立っているとして Aristoteles の見解を受け継ぐアレクサンドリア学派は類似論を主張した。Crates は当然変則論者で，彼の講義はローマで広く議論され，かの Julius Caesar（100-44 v. Chr）も類似論者の立場に共鳴し文法研究書 “de anologia”「類似論について」を著したと言われている[23]。

Dyonisios Thrax と同時代の文法家 Marcus Terentius Varro（116-27 v. Chr.）はローマが生んだ最初の優れた文法家で，彼は変則論対類似論の論争に触発され，全体で25巻からなる “De lingua latina”「ラテン語について」を書いた。Varro はこの書の中で明らかにギリシャの文法家達の術語や範疇を殆んどそのまま引き継いだのであるが，ラテン語を従来のギリシャ語文法の型の中に押し込めることはせず，ラテン語文法体系を独創的な発想で展開させている[24]。彼の文法のうち現存しているのは主に語源論

を取り扱った第5～第10巻だけであるが，これらも完全な形ではない。第14巻以降に書かれていたとされる統語論に関する記述も消失していてその具体的な内容は残念ながら知る由もない。そこで残されている巻の中から統語論に関連をもつ部分を検討してみることにする。

Varro によると，語はそれ以上意味ある部分に分析することができず，あらゆるひとがそのさまざまの形態を同じふうに用いるところの最小基本形式であると定義されている[25]。この定義によって「語」は始めて意味論の場に持ち込まれたと言える。ラテン語の語を分析するために彼は次の3段階を提案している：1. 語を屈折変化する語と，しない語に分けること，2. 屈折変化する語のうち，あるものは規則的に，あるものは不規則に変化する，3. 規則的に変化するものには4種類ある，(a) 格のみをもつもの，(b) 時制のみをもつもの，(c) 格と時制をもつもの，(d) 格も時制ももたないもの。(a) の例として名詞，(b) の例として動詞，(c) の例として分詞，(d) の例として副詞がある[26]。つまり Varro は格と時制の有無を品詞分類の基準にしているのであるが，これは前の「語」の定義とは全く異っている形態論的な分類である。

そしてこれらの4つの品詞を次のように範疇化している：名詞―名ざす形式，動詞―陳述する形式，分詞―結び合わす（すなわち，名詞と動詞の統語法を共有する）形式，副詞―支える（すなわち，動詞に従属するものとして，動詞とともに構文をつくる）形式[27]。

名詞と動詞は意味論的な観点から，分詞と副詞については統語論的な観点からの範疇化である。これらの記述からして Varro の統語論を推則するのは危険であるけれども，少くとも彼の品詞分類に関して言えば，たとえその独創性が高く評価されるとしても，やはり彼以前の統語研究の成果を充分ふまえたものではない[28]。

ローマ時代に活躍した文法家の一人は，すでに述べたように Thrax の「文法術」をラテン語に翻訳しラテン語に当てはめた Remmius Palaemon（紀元1世紀）である。Palaemon の訳書 "Ars grammatica"「文法術」は現存していないが，その全体像は比較的良く知られている。Thrax の場合と同じく Palaemon の文法でも統語論は少ししか扱われていない。彼の文法はおおむね次のような構成でできている：第一部　音声論（音声，文字，綴り），第二部　品詞（名詞と動詞の変化を含み，個々の品詞がその偶有的属性（Akzidentien）と共に取り扱われている），第三部では正統文法からの違反，例えば外来語（Barbarismus）や文法破格（Solözismus）が取り扱われている。のちに正書法，ギリシャ語との違い，韻律論に関する章も加えられている[29]。

品詞分類に関して Palaemon は Thrax の8個をかたくなに守り，ラテン語にはない冠詞の代りに Thrax が副詞に分類していた間投詞を1品詞と数えている。一方 形容詞は名詞と同等に扱われたままであった。この分類法は中世を経て現在にまで伝えられ，文法の中に完全に定着していった。

Palaemon のあとに続く重要な文法家として4世紀中葉に活躍した Aelius Donatus の名が挙げられるが，彼の短い文法書 "Ars grammatica" は学校での入門書として著わされたもので，殆んど全面にわたって Palaemon の構成に基づいており，したがって統語論に関しても注目に価する記述は見当らない。

ラテン語文法に関して我々が最大の注目を払わねばならないのは Priscianus Caesariensis（512～560 n. Chr.）である。彼は6世紀頃コンスタンティノポリスでギリシャ語を教えていたローマ人であった。Priscianus はとりわけアレクサンドリア学派の文法家 Apollonios Dyskolos の言語理論を支持していた。彼のラテン語文法 "Institutionum grammaticarum"「文

法教程」は全18巻からなる大著で，最初の1巻から16巻までは“Priscianus major”「プリスキアーヌス文法主径（大プリスキアーヌス）」と呼ばれ，音声論と形態論を取り扱っている。残りの17巻と18巻は“Priscianus minor”「プリスキアーヌス文法副径（小プリスキアーヌス）」と呼ばれ統語論が論じられている。彼のラテン語文法は教科書として広く使用され，また中世の言語論にとっては不可欠の理論書でもあった。

言語を分析するにあたって Priscianus はまず意味論的な基準が主要なものであるべきだとする。しかしこの意味論的基準が首尾一貫して適用されているわけではなく，形態論的な基準あるいは統語論的な基準が併用されていると言える。彼は dicto「語」の概念を，「完結した表現の最少部分である」と定義している，すなわち「語」は全体としての意味をもつ表現を分解して得られる意味をもった部分として理解される。この解釈は原則的には Apollonios の定義に基づいている。次に Priscianus は oratio「語文」という概念を設定している。この術語は Syntagma，句，文を含む諸構成を意味しており，語は発話行為の中で複合構造の中に組み込まれ，ある完結した思想を表現する語の統合体つまり oratio「語文」を作るとされる[30]。この概念は従来の文の概念を伝達機能の観点からさらに徹底させたもので，簡単な例で言えば，「君は将来大学で何を専攻するつもりか？」という問いに対する答え「言語学。」も oratio「語文」に価する。

さてこれらの概念規定に基づいて Priscianus は8個の品詞分類を行っている：1. 名詞（形容詞を含み，その特質は実体，性質を表わす），2. 動詞（動作，被動作を表わし，時制と法の形式をもつが，格変化はしない）。3. 分詞（動詞と名詞の諸範疇を共有している），4 代名詞（固有名詞にも代ることができ，特定の人を指す），5. 副詞（屈折変化せず，動詞に意味を付加する），6. 前置詞（他の品詞の前後に置かれ，屈折変化しない），

7. 間投詞（統語論的には動詞から独立し，感情を表わす），8. 接続詞（他の品詞を結び，それらの間の関係を表わす）[31]。

Priscianus は意味基準による分析を重要視したのであるが，上の 8 品詞の定義は意味基準だけでなく，形態論，統語論的な基準にも依存していることは一目瞭然である。

Priscianus の統語論第17巻の中で特に注目すべきものは，彼がラテン語の統語構造を分析するにあたり，今日の言語学でいわれるところの置き換え操作（Permutation）を用いていることである。ラテン語文：Idem homo lapsus heu hodie cecidit「(一度）ころんだことがあるその同じ人が気の毒に今日もころげ落ちた」をもとに各部分の置き換えを行ない，又新しい成分を付加することによって文に起る変化を調べ，さらに文構成要素の意味と語形の分布の可能性を記述している。第18巻の中で Priscianus は動詞の法について述べ，その中での文の組立タイプに 4 種類あるとして，それらを 1. 自動組立，2. 他動組立，3. 再帰組立，4. 再帰他動組立に区別している（retransitiv)。その区別の基準は人を表わす主語に何が起るかということになっているがここでもまた意味基準が用いられている。

このように Priscianus の統語論は彼がそれを記述する基準を意味論に求めたがためにラテン語の統語体系を厳格に形式的な仕方で記述できないままに終っている[32]。

4. 中世

中世に入って言語研究は不毛の時代を迎え，特記すべき理論の進展は見られなかったと言って良い。当然統語論に関する研究も特に見るべきものがない。Donatus や Priscianus の文法は殆んど修正されることなく受け継がれていった。そのような状況の中でもとりわけ12世紀からルネッサンス

までの時期の文法研究には注目する必要がある。当時の学問の根底を成していたスコラ哲学は主に Aristoteles の哲学に依拠しており，あらゆる領域にわたって影響を与えた。スコラ哲学者達による古代ギリシャ哲学の再発見は，文法研究にも影響を及ぼし，文法は論理学と形而上学の統御下に置かれるに至ったのである[33]。この時期を代表する文法家の一人は12世紀なかば頃パリ大学で教えていたとされる Petrus Helias である。彼は Priscianus の文法に注解を加えているが，原著書の文法的な用語に替えてしばしば Aristoteles の論理的な術語を当てはめて，当時のラテン語文法の用法の論理学的考察を試みている[34]。Helias の功績の中で本論文のテーマに関係をもつものは彼が従来の名詞（nomen）を実質名詞（substantivum）と形容詞（adjectivum）に分けることを提唱し，さらに動詞を論理学的に握把しそれを述語と見なしたくらいである。

Helias と並んで中世の言語観に大きな影響を与えた学者に Petrus Hispanus（？-1277）がいる。Aristoteles 自然学と形而上学をパリで学び，また医学と論理学の権威者の一人でもあった彼はのちに教皇に推され（1276），ヨハネス21世として在位した。Hispanus が著わした論理学書「論理学大綱」（Summulae Logicales）は明かに Aristoteles に傾倒したものであるが，その中の言語に関する記述は殆んど意味論に所属するものである。しかし彼の理論のなかには統語論に関連する貴重な指摘が含まれている。Hispanus は名辞（term；実体，性質，量あるいはその他の Aristoteles の範疇を表意するもの）の代置（suppositio；実体的な名辞を，それが他のものに代わるとして受けること）には布衍（applification）と限定（restriction）があることに言及している。例文 homo musicus currit「音楽的な人が走る」において homo という名辞が，musicus との結合によって制限を受けるとし，これを代置における限定であると説く。布衍については homo

potest esse Antichristus「人は反キリスト者たりうる」という文をもとに，homo という名辞が話法の助動詞 potest「できる」と結合し，「人」は前の文のように限定しきれず，あらゆる「人」に該当すると述べている[35]。

「限定」に関する章で Hispanius は組立てをなすいくつかの名辞が相互に限定しあうことを指摘し，homo musicus という表現において名辞 homo はもはや「音楽的でない人」を指すことはできず，一方 musicus という名辞も「人」以外のものについての表現と解することはできないと述べる[36]。言語の構成要素が相互に制約，規定し合うとするこの考え方は，現代の構造主義言語学の概念に近づくもので，依存関係文法の Valenz 理論において言われるところの論理的 Valenz，意味的 Valenz，統語的 Valenz の概念に直接結びつくものと言えよう。

Hispanus より少し時代は溯るがラテン語の統語論をきわめて具体的に取り扱った文法書が著わされている。それは Alxander de Villa-Dei による "Doctrinale"（1199年）で，ラテン語学習者のために書かれたラテン語の六歩格の詩による韻律形式の文法書である。その内容の大部分は Priscianus の文法に従っているが，全体2600行のうちおよそ170行ほどがラテン語の文構成，格形，時制，関係代名詞，接続詞その他の用法が語られている[37]。その中の語順の原則に関する一節は次の如しである[38]：

語の組立て方はこのように，呼格があれば
　　第一位に
これに続くは主格形，次に来るのが
　　人称動詞
呼格も主格もない時は動詞を文の
　　先頭に
副詞がおよびでない時は，動詞の後には

3格，4格……（西本訳）

この文法書は中世後期を通して広く用いられたと伝えられている。

さて Hispanus に続いた研究者達はモディスト（Modistae）達である。モディスト達はスコラ哲学全盛期の13世紀後半から14世紀に活躍した。言語に関する彼等の主張は，全ての言語には生来の普遍的な文法構造，一つの普遍文法が存在すると言うものであった。この考え方は後の R. Descartes や W. v. Humboldt の言語観に結びつき，さらには N. Chomsky 等によって展開されていったことは言うまでもない。

モディスト達の言語研究の中で統語論に関連する提言は決して多くはない，というのは彼等の研究は主に言語の一般理論や意味論に向けられていたからである。そこで統語論との関わりで重要と思えるものを次に拾い上げてみることにする：

13世紀の文法家 Eberhard v. Béthune は1212年に著した文法書 "Grecismus" の中で従来から受け継がれてきた nomen という品詞を nomen substantivum「名詞」と nomen adiectivum「形容詞」に区別し，さらに論理学ではすでに用いられていた「主語」（Subjekt）と「述語」（Prädikat）を文法上の概念として導入した。Eberhard によると，「文が完全であるためには二つの事柄，すなわち主語と述語が必要である。主語は，それについて話がされるもので，動詞に人称を付与する。述語は主語について陳述を行なうもので……」[41] というふうに彼の概念規定は今日なお修正する必要はない。

モディストの用いる概念に従って統語論を取り扱った文法家に Martin Dacus（1270年頃）がいる。Dacus はモディスト達の唱える思弁文法（Grammaticae Speculativae）の原理にラテン語を押し込めようとしており，具体的な研究成果が引き出されぬままに終っている感が強い[42]。一方同じモ

ディストの Thomas von Erfurt (1350年頃) は思弁文法の原理に抵触するにもかかわらず伝統文法の定義に基づいて，各品詞の統語機能を記述しようとした文法書を書いている。

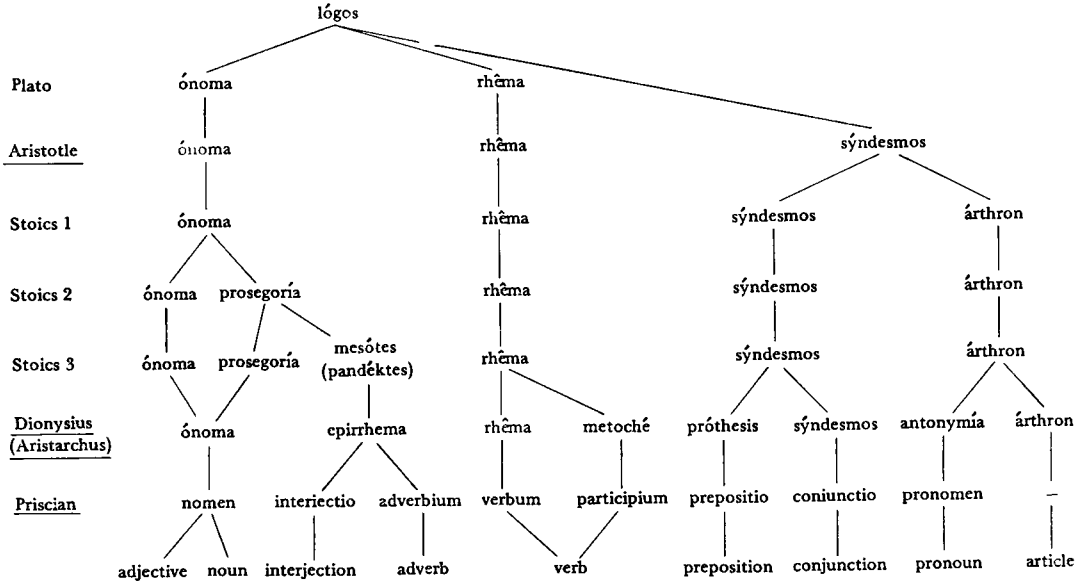
中世の言語研究，文法研究の成果ははじめにも述べたように決して満足できるものではない。なかでも統語論に関する記述は全体的に眺めてみるとやはり古代ギリシャ・ローマ以来顕著な進歩もなく停滞をし続けていたと考えるのが妥当であろうかと思える。

古代から中世に至る間の統語論に関係する研究は主に文法単位の設定，つまり品詞の分類が中心的な課題であったと言わざるを得ない。そこで Platon から Priscianus に至る品詞分類の変遷を系統的に示した Robins の一覧表を参考のため次頁に掲げておく。

なお次回は第一章の続き（その2）として Martin Luther の聖書翻訳を契機に，その後数多く著わされた初期のドイツ文法のなかの統語論に関する記述に触れつつ，Schottelius から Gottsched, Adelung 等の統語論を系統的に考察していく予定である。

注

1) Jacob Wackernagel, "Vorlesungen über Syntax mit besonderer Berücksichtigung von Griechisch, Latein und Deutsch", Erste Reihe, 1926 Basel, S. 1.
2) Vilhelm Thomsen, "Geschichte der Sprachwissenschaft bis zum Anfang des 19. Jahrhunderts", deutsche Übersetzung von Hans Pollak, 1927 Halle (Saale), S. 10.
3) Platon, "Sophistes" 262 A, "Kratylos" 399 A-B, 425 A, 426 E, 431 B……; vgl. Francis P. Dinneen, "An Introduction to General Linguistics", 1970,「一般言語学」三宅・山中・秋元共訳，1973 東京，95頁.
4) Vgl. H. Steinthal, "Geschichte der Sprachwissenschafr bei den Griechen und Römern", erster Teil, 1890 Berlin, S. 185.
5) Aristoteles, "Rhetorica" III 4-5.



(R. H. Robins, "The development of the word class system of the European grammatical tradition", 1966.)

6) Aristoteles, "Poetica" XX 6.

7) Vgl. Steinthal, erster Teil, 1890, S. 107.

8) Vgl. Dinneen 1973, S. 108 f.

9) Vgl. Rudolf T. Schmidt, "Die Grammatik der Stoiker", Schriften zur Linguistik Band 12, 1979 Braunschweig/Wiesbaden, S. 22 f.

10) Thomsen 1929, S. 16.

11) Aristoteles の「詩学」20章にでて来る ἄρθρον を Aristoteles の功績と考える学者（Dinneen）とストア学派のそれと考える学者（Robins）がいる．杉浦茂夫著「品詞分類の歴史と原理」1976年こびあん書房，18頁参照．

12) Wackernagel 1926, S. 15 ; Schmidt 1979, S. 84-87.

13) R. H. Robins, "Ancient and Mediaeval Grammatical Theory in Europe" 「ヨーロッパ古代中世文法論」郡司利男訳，南雲堂，東京1952. 33-34頁

14) Vgl. Robins 1952, S. 36.

15) Vgl. R. H. Robins, "The development of the wort class system of the European Grammatical Tradition", in, "Foundation of Language" 2. 1966, S. 18.

16) Dinneen 1973, 126頁.

17) Vgl. John Ries, "Was ist ein Satz?", 1931 Prag, S. 8.

18) Dinneen 1973, 122-123 ; vgl. Berthold Delbrück, "Grundriss der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen", von Karl Brugmann und Ferdinand Berthold Delbrück, 3. Bd. erster Teil, 1893 Straussburg, S. 3-5.

19) Delbrück 1893, S. 7.

20) Theodor Benfey, "Geschichte der Sprachwissenschaft", 1869 München, S. 157-159.

21) Vgl. Wackernagel 1926, S. 2 ; F. Delbrück, "Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen", 1919 Leipzig, S. 20 ; H. Steinthal, "Geschichte der Sprachwissenschaft bei den Griechen und Römern", zweiter Teil, 1891 Berlin S. 341.

22) Vgl. Steinthal 1891, zweiter Teil, S. 344-345, ; Delbrück 1919, S. 20-23.

23) Thomsen 1929, S. 20.

24) Robins 1952, S. 47.

25） Vgl. Dinneen 1973, 133頁.
26） Vgl. Dinneen 1973, 133-134頁；杉浦1976, 24頁.
27） Vgl. R. H. Robins, "A short History of Linguistics", 1967 Longmans, S. 51；杉浦1976, 24頁.
28） Vgl. Benfey 1869, S. 166.
29） Vgl. Hans Arens, "Sprachwissenschaft-Der Gang ihrer Entwicklung von der Antike bis zur Gegenwart", zweite Auflage, 1969 Freiburg/München, S. 32.
30） Vgl. T. A. Amirova/ B. A. 01'chovokov/ Ju. V. Roždestvenskij, "Abriß der Geschichte der Linguistik", deutsche Übersetzung von Barbara Meier, 1980 Berlin, S. 153.
31） Vgl. Dinneen 1973, 139-140頁；Robins 1967, S. 57 f ；杉浦1976, 26頁.
32） Amirova/01'chovokov/Roždestvenskij 1980, S. 154.
33） Robins 1952, S. 70.
34） Dinneen 1973, 155-157頁.
35） Dinneen 1973, 166頁.
36） Dinneen 1973 166頁.
37） Robins 1952, S. 71-72.
38） Arens 1969, S. 38.
39） Arens 1969, S. 39.
40） Robins 1952, S. 80. vgl. Lothar Paul "Geschichte der Grammatik in Grundriß", 1978 Weinheim/Basel, S. 296.
41） Arens 1969, S. 39.
42） Vgl. Paul 1978, S. 294-295.

付　　記

この論文は昭和54・55年度文部省科学研究費補助金（研究課題番号445040）による研究の一環をなすものである。